

令和4年度現代課題講座に参加して（報告）

令和4年10月21日午後、奈良県立教育研究所にて奈良県教育委員会主催による現代課題講座が、開催された。開催の趣旨は県内に在住する「生活者としての外国人」の日本語教育環境を充実させるうえで必要な考え方や奈良県の日本語教育環境の課題を知り、日本語教育の充実について考えるとともに、多文化共生社会について考えることである。参加対象は各市町村の日本語教育担当者および多文化共生施策担当者、公民館等の社会教育関係者、学校教育関係者、日本語教室関係者・国際交流団体の関係者などである。大学女性協会奈良支部からは疋田、志垣の2名が参加した。講座内容は次の通りである。

1 報告 「大和郡山市における日本語教室」

大和郡山市人権施策推進課指導主事 丸山裕二

大和郡山市では多文化共生を目指して、市内で生活している外国人の方のための日本語教室を毎週日曜日の午前中、南部公民館で行っている。ここでは日本語を指導するボランティアスタッフと、中国やブラジル、ベトナムなど様々な国の学習者が、言葉や文化の違いを超えてお互いの理解を深めている。この教室は市内で生活する外国人の学習者のために、20年以上も前から学習者目線で教室を開いていた一人の中心者から始まり今日に至っている。教室で大切にしてきたことは

- ①聞き取り調査で把握した学習者の思い、願いを大切に学習内容をきめる。
- ②子ども教室という枠組みで小・中・高生も参加。進級のつど学習や学校生活についていけるようにきめ細やかな対応をし、必要に応じて進学相談なども行う。
- ③学習者の状況により未就学児を預かる託児室を備えて子どもを見るスタッフをつける。などである。

そのほか場合により生活上の困りごとの相談などにも応じている。数十年にわたって長く続いている理由は人権の思想を大切に、学習者の思いを大事にして心地よく過ごせるコミュニティ社会を目指してきたからである。教室では通常の勉強会のほか館外学習や年末交流会も開催している。教室を運営する中に共生社会を築くうえで大事なことが詰まっていると考えられる。現在は約50名の学習登録者がいる。

丸山主事の報告以外に、フロアのボランティアスタッフからも活動の状況報告や学習者からボランティアスタッフになって活躍する人が数人いるといった話が紹介された。

当日同行した疋田会員からは、以下の感想があった。

郡山の例でよいと感じたところは、学習はほぼマンツーマンでボランティアの自由に任せているが、行政がある程度かわりを持ち、スタッフ会議を開いて情報を共有し、難しい問題の解説の場が設けられていることだと思った。

2 講演 『生活者としての外国人』のための地域日本語教育の役割と課題』

奈良教育大学教育連携講座准教授 和泉元千春

和泉元先生からは様々な省庁からの資料・データをもとに次の4項目わたる講演があった。

- ① 「生活者としての外国人」とは？
- ② 「生活者としての外国人」をめぐる動き
- ③ 「生活者としての外国人」のための日本語教育の内容と方法
- ④ 地域日本語教育の役割と課題

現在、日本国内の様々な状況に連動して在留外国人がすべての都道府県において増えており、地域における多文化共生化が進んでいる。このような変化の中で、外国人を日本社会の一員として受け入れ、外国人が日本人と安心して生活できるよう、より円滑な意思疎通の実現に向けて日本語の習得が重要である。

日本語教育の推進についてはすでに閣議決定され、基本的な方針やその内容などが明確化されており、国及び地方公共団体・事業主の責務は重要であるが、具体的な教育内容などは地域の実情に合わせて設定・作成される。地域の日本語教室の役割は地域で見えない「生活者としての外国人」の存在を見える存在にして居場所を開拓し、その人に応じた日本語学習支援をすることにある。しかし、令和3年度「日本語教育実態調査」によると、奈良県は地方自治体数に比して教室数が少なく、空白地帯数が近畿の他府県中最も多いという状況であり、ここに奈良県の課題が見受けられる。

(報告者 志垣瞳)